小学校専門生活（家庭領域）

担当者：貴田康乃
榊原典子

１．本授業内容設定の主旨とその観点

家庭科は従来から総合的性格をもつ教科とされている。すなわち「家庭生活を総合的にとらえる」，「知識・技能・態度を実際の活動によって統合する」，「他教科で学んだ知識や技能を応用する」などの点から，総合的能力を育成する教科ととらえられている。またこのことが高学年履修の根拠にもなっている。しかし，最近では家庭科を５年生で学習し始めると，児童の生活習慣の未形成や生活体験の乏しさから，学習指導に困難を生ずることも多くなってきた。従来は家庭や学校その他で基本的な習慣や生活体験，生活技能を身につけて学習にのぞむ児童が大半であったため，家庭科では基本的能力を確認しながら総合学習へと移行できたのである。しかし今や家庭生活だけでなく子どもをとりまく生活が変化・多様化し，幼少時から培われるべき基本的生活自立能力の育成は容易ではなくなってきている。したがって小学校教育でも低学年から活動を主体とした，生活を対象とする学習の機会を保障してやることは重要であり，また家庭科でもその必要性を強く感じているところである。

そこで，本授業ではまず小学生の基本的生活自立能力の実態を，現代の家庭環境・生活環境の変容とあわせて取り上げることによって，生活科における自己認識・社会認識の観点の必要性を理解させる。また，家庭生活に関する活動を取り上げた生活科の授業ＶＴＲを視聴し，学習児童の活動の特徴や教師の指導上の配慮事項などを具体的に観察させる。さらに，自立への基礎を養うためには生活体験や生活技能は不可欠であると考え，受講者自らにも創作・製作活動を行わせることによって，体験の重要性や技能の必要性を体得してもらうことをねらいとし，実習を組み入れている。本年度は以下のような授業を行った。

２．授業の内容

第一回目の授業

１．児童の「できる生活能力」の実態

家庭科教育学会近畿地区会では「初等教育段階における生活領域の学習内容に関する研究」と題し，140項目にわたる児童の基本的生活能力の調査を行い，できる生活能力の実態を分析しており，これに小・中・高等学校教師のグループによる「現代の子どもの生活技術の実態」などの結果もあわせ，校種別，学年別，男女別，市郡部別（地域別）にみた「できる」能力の違いとその要因を，現代の家庭生活の実態とあわせて紹介する。

２．家庭生活に関する生活科学習活動の実際

第７回生活科授業研究会で公開された「○○○いかが，かってかって！」の授業における，教師の一斉指導場面と抽出児の活動場面に着目して編集したＶＴＲを視聴し，児童の活動の特徴や教師の指導上の配慮事項などを具体的に観察させ，簡単なレポートにまとめさせる。

３．次時の予告と課題

《授業の趣旨，配慮事項》

(1) 「できる能力」では，直接体験する機会が減ってきているもの（たとえばナイフで皮むきをするや小刀で鉛筆を削る（以下同様)），きちんと教わったことがないもの（配膳の際，食器をきちんと並べる)，学年が進むにつれて退行するもの（約束を守る)，家庭科の学習効果がみられるもの（ボタンつけをする)，上達がみられないもの（箸の持ち方，紐結び)，地域で差がみられるもの（簡単な生活用具が使えるや環境を配慮したゴミ処理）などを，現代の子どもをとりまく家庭環境・生活環境とあわせて考えさせ，直接体験の重要性を知らせる。なお男女でできる生活技術に差はあるが，発達の型は似ており，生活経験の差が要因になっていることに気づかせる。

(2) 「○○○いかが，かってかって！」の授業における教師の指導上の留意点として，①達成感を味わわせるために班で協力してがんばって売るようはたらきかける，②どの子も活動できる場面を保障するために“みんなの約束”を確認する，③時間を区切って活動させるために時計の見方を復習する，④売れ残りがでた班でもがんばりをほめてやる，⑤単元目標であるものを大切にする心を育てる観点に立ち返るなどをＶＴＲ場面から読みとらせる。また児童については，いきいきした活動場面や，友達との交流場面，品物選びや呼び込みで工夫する問題解決場面などでの行動の特徴を，生活科の目標や「できる能力」との関連から考察させる。

(3) 次時の実習に備え，班分けをし，折り紙創作のテーマを決めさせる。またテーマに沿った折り紙の折り方を調べてくることを課題とする。

第二回目の授業

1．折り紙による創作

数人づつのグループに分かれ，テーマにあわせた折り紙による創作を模造紙大で作らせる。作品完成後に全体で批評会をし，簡単なレポートを課す。(写真－1）

2．次時の予告と準備

《授業の趣旨，配慮事項》

(1) 受講生にとって折り紙はすでに身近な遊びではないが，簡単な材料で様々な工夫ができ創造力をはたらかせる余地がある。したがって，折り紙の折り方を思い出させるだけでなく，テーマに沿った折り紙を作り出すこともねらいとしている。また折り紙をすることによって幼い頃の遊びを思い出し，子どもの気持ちを追体験することができる。さらに班活動による創作のため，受講者同士で協力しあい教えあうことで，共同作業の利点や注意点を考えさせることができる。完成の喜びを知らせると同時に，作品を生活の中で生かそうとする態度の育成にも気づかせたい。

(2) 次時の実習に備え，準備物を指示する。なお，材料の布は大学より提供するので，裁断の係を各班で決めさせる。

第三回目の授業

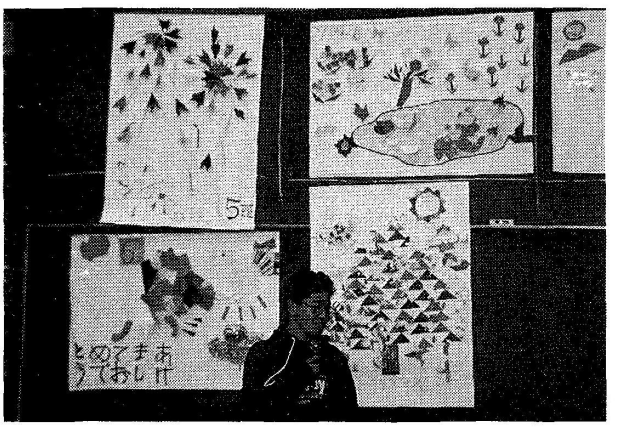
5．布を使った小物づくり

布端の始末がいらないフェルト生地を使って，ティッシュ入れまたは小銭入れを各人で製

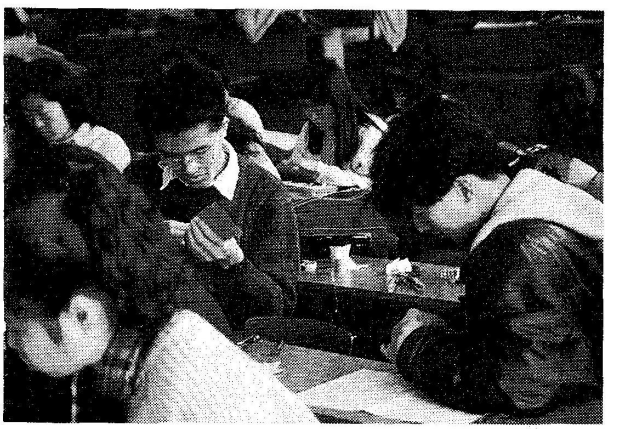
作する。作品提出と感想文提出を課す。（写真－２）

《授業の趣旨，配慮事項》

布を使った小物づくりは，家庭科の被服製作の初歩であるが，紙の工作しかしたことがない小学校低学年児童に，紙とは違う布の特徴を知らせ，なじんでもらいたいと考える。また小さな布切れで，自分の持ち物が作れる喜びと便利さも味わってほしい。通常の針と糸の使用は低学年では手先の巧緻性からまだ無理なので，ここでは穴を開けてリボンを通し，紐結びをすることによって布の縫合の基本を知らせる教材（ティッシュ入れ）を用意している。ただし，受講生には針と糸を使う教材（小銭入れ）も可としている。また作品には余ったフェルトやししゅう糸で装飾を施すことができ，個性の表現や作業の早い学習者への発展課題として活用させる。



写真－１



写真－２

Ⅲ. お わ り に

「初等生活科教育」はいわば基本的，総論的なものであり，生活科成立の経緯，目的，性格，内容，方法等を教育学的，発達心理学的な観点，さらに先行して存在した（1970）養護学校の生活科との対比によってそれらを明らかにしようとしている。自然，飼育・栽培領域は体験と理論の融合を図る例としてとりあげてみた。「小学校教科専門生活」では各論的に野外教育，社会，家庭領域の実践的知識・技能が扱われた。多人数の教官がそれぞれの領域を対象とする授業であるので，既述のようにできるだけ生活科の理念・体系に関する統一的見解を基底にした展開を図ったが，それぞれの内容は，解釈における担当者の差違や重複があり，また評価といった重要な項目の検討の不足などが指摘できる。

この小論を将来，生活科を指導する学生のための「初等生活科教育」「小学校教科専門生活」の確立に向けての出発点として，今後も組織的な検討を加える予定である。関連のある他大学や諸機関からの情報や忌たんのないご意見をお願いしたい。

文　　献

1）熱海則夫（1989）生活科教育　ぎょうせい
2）梶田叡一他（1989）　生活科授業の設計と展開　国土社
3）中野重人（1989）　生活科教育の理論と方法　東洋館出版社
4）宮本光雄（1989）　生活科の理論と実践　東洋館出版社
5）長岡京市立長法寺小学校（1988）　長法寺小学校紀要
6）　〃　（1989）　〃
7）　〃　（1990）　〃

京都教育大学生活科研究グループ

平成3・4年度（1991，1992）教育方法改善経費による「生活科の方法・内容に関する研究（代表者・田渕春三）」のメンバー

教育学領域：村上登司文（教育学科），太田正己（発達障害学科），山口一雄（幼児教育学科）
心理学領域：矢野喜夫（教育学科）
自然領域：藤田哲夫，広木正紀（理学科）
飼育・栽培領域：桐田襄一，田渕春三（産業技術科学科），梁川　正（附属環境教育実践センター）
野外教育領域：遠藤　浩（体育学科），三野　衛，多田光利（附属京都小学校）
　　西田　純，川端建治，藤田加代（附属桃山小学校），
　　沼田　茂，高岸正司（附属養護学校）
社会領域：高山博之，川崎英一（第一社会科学科）
家庭領域：貴田康乃，榊原典子（家政科）

京都教育大学　機関リポジトリ　クエリの森



この文献は、国立情報学研究所において電子化されたものを、本学でテキスト加工したものです。